

紺野 優加(1510028)

〈序論〉

研究動機・研究目的・研究方法

筆者は中学校からハンドボールをはじめ、その時からゴールキーパーを任されている。ゴールキーパーは他のポジションと比べ、ほぼ守りに徹し、シューターとの1対1、1点を取るか、取られるかの勝負ができ、試合全体を左右するポジションであると考えている。他のチームのゴールキーパーは、筆者と比べ、身長も体格も様々であり、またゴールキーピングにも特徴があることに気付いた。そこで、筆者と同じ女子がどんなゴールキーピングを多く行っているのかを研究していきたいと考えた。今回は、特にゴールキーパーに視点を向けるため、シューターとの1対1の場面、つまり速攻の場面でのゴールキーピングに絞って研究を行っていく。

本研究の目的は、運動モルフォロジーの立場から、ハンドボールにおけるゴールキーパーのミート動作に着目し、速攻の場面でのゴールキーピングを類型化していくことである。ゴールキーパーに関する既存の構造体系を分析しながら、それらの問題点を明らかにする。

研究方法として、平成25年度全日本学生ハンドボール選手権において、上位に進出した大学のゴールキーパーを観察対象にし、試合中に見られるシュートのうち、速攻の場面でのゴールキーピングを分類していく。さらにそれぞれのシュートコースに対するゴールキーピングを、ミート動作を中心に印象分析を行っていく。

〈本論〉

第1章 ハンドボール競技の構造特性およびゴールキーピングの技術

ハンドボールのゲームの活動の目標は、ボールを手で相手チームのゴールに投げ入れ、自分のゴールを相手の攻撃から防御することである。その中でゴールキーパーは、防御においては、唯一ゴールそのものを守る最終防御者となり、攻撃においては、最初にボールを扱い、状況によっては直接シュートを狙うことが可能なポジションである。

ゴールキーピングは「位置取りと構え」「詰め(プレス)」「飛び出し」「ボールミート」の4つからなっている。様々な局面が合わさり、ゴールキーパー独特の運動や技術が多く存在している。

第2章 ゲームの運動観察方法について

ゲームの運動観察には、運動モルフォロジー的考察法や、印象分析を行うことによって、単に運動をみたときの感じといった主観的感情ではなく、本質的な諸カテゴリーから運動

現象のなかの諸徴表を把握することができる。特にマイネルの運動カテゴリーのうち「運動の局面構造」「運動リズム」「運動の先取り」「運動の正確さ」を用いて、印象分析を行う。

この場合「類型化」とは、共通する特徴や類似点をもった個々の存在や現象を、普遍化することである。本研究では、様々なゴールキーピングのなかで、ミート動作に着目し、動作の特徴や類似点をまとめ、いくつかのタイプに分類することで構造体系を明らかにしていく。

第3章 ゴールキーピングの類型化

この章では、平成25年度全日本学生ハンドボール選手権における速攻場面のシュートに対するゴールキーピングを、ミート動作に着目しながら、印象分析とその考察を行い、既存の体系にはない8つのゴールキーピングを観察することができた。

高い位置の ボールに対して	中間の位置の ボールに対して	低い位置の ボールに対して	股下の ボールに対して	ループシュート に対して
大の字 「大の字ノーマル型」 「大の字右左型」 「大の字左右型」	腰脇 「中間腰脇型」	大の字 「大の字沈み込み型」	両足を内側へ引く 「股下両足閉じ型」	誘い 「浮かし誘い型」
足上げ 「足上げ型」				

〈結論〉

本研究では、ミート動作に着目し、ゴールキーピングの類型化を試みることによって、ゴールキーピングの構造体系を明らかにし、運動モルフォロジー的視点から、速攻のシュート場面におけるゴールキーピングを、8つに類型化することができた。どのゴールキーピングにおいても、ボールをミートするという目的に有効な形であるため、それぞれのゴールキーピングの間に優劣は存在しないと考える。一瞬の場面に最適な構え、位置取り、飛び出し、ボールミートを選択し、実行することで、最善のゴールキーピングが行える、ということが最も重要である。そしてその局面ごとに、選択肢が多いほど、より経済的で確実なゴールキーピングにつなげることができる。実際の試合では、ゴールキーピングは一瞬であり、その一瞬に様々な判断をしつつ、ほぼ自動的にゴールキーピングを実行しなければならない。そのためにも類型化によってゴールキーピングの構造体系やそれぞれの特徴を理解し、練習において何度も実践することで自動化し、自分の武器にしていく必要がある。多くのゴールキーピングを知ることや身につけることは、ゴールキーピングの幅を広げてくれる。ゴールキーピングの幅の広がり、チーム全体のレベルを向上させ、ハンドボール全体の競技力向上にもつながっていくと考える。 (引用・参考文献省略)